

農業主義的南部とその反ニグロ的伝統

荒 木 博 之

The Agrarian South and its Anti-Negro Tradition

Hiroyuki ARAKI

(昭和32年11月13日受理)

人は1956年から1957年はわたって Tennessee 州 Clinton, Texas 州 Mansfield, Arkansas 州 Little Rock に於て起った黒白共学をめぐるの一連の事件を思い起す事が出来るであろう。我々は Ku Klux Klan の幽霊が再びその姿をあらわした時の驚きと失望を忘れる事は出来ない。1863年の奴隷解放宣言から稍々一世紀を経過した今日、かくも根強く南部に残存している黒人への憎悪と偏見とは一体何であろうか、そしてそのような偏見を支えている南部とは、南部人とは何であるか、我々はこれ等のことを明らかにする事によって genuine region in America^(註1) といわれた南部の性格を知る一つの手がかりを得る事が出来るであろう。

I. 甘き月光とマグノリアの南部^(註2)

我々が南部人の特性の起源を探ろうとする場合、彼等の農業へのひいては土地への情熱を見出すことが出来る。農民を“the chosen people of God”として自営農民層こそ民主主義社会を構成すべき理想であると考えた Jefferson の思想はこの事実を明らかに裏付けている。南部には Tide Water Country と呼ばれる広大な土地がある。この温帯から熱帯へ長く带状に連なった豊饒な低地はあらゆる季節にわたって実り多き収穫を彼等に約束し豊かな生活の恵みを彼等に与えた。

“From the beginning, Southerners on the whole were less troubled by the necessity for hard work than were their contemporaries in New England. Even in the seventeenth century an outsider would have recognized the beginnings of a Southern mode of life in the structure of houses, the plans of farms, and crops grown.”^(註3)

はじめに煙草がやって来た、それが駄目となると今度は棉が彼等に繁栄をもって来た。やがて“Kotton is King”と彼等を豪語せしめた南部の繁栄も南北戦争と共に過去のものとなった。そしてそのあとに破壊したものに対する憎しみと偏見、破壊されたものに対するノスタルジーと夢だけが残った。

多くの文学者達がその夢について書いた。Irwin Russell, Sidney Lanier, Thomas Nelson, Page, A. C. Gordon 等のいわゆる local color writers と呼ばれる作家達である。彼等はつきせぬ南部へのノスタルジーと愛情とをその牧歌的な作品の中に書き綴った。

John Crowe Ransom, Allen Tate, Donald Davidson, Robert Penn Warren 等、*The Fugitive* の流れをくむ四人と Lyle Lanier, Frank Lawrence Owsley, John Donald Wade 等を含む八人、即ち“Twelve Southerners”といわれる人達の symposium, *I'll take My Stand* が世に出されたのは1930年のことであった。この symposium の立場はその副題 The South and Agrarian Tradition が示している様にいわゆる American or prevailing way に反対して、a Southern way of life 即ち南部的生活様式を支持する傾向を持ち、両者の区別をあらわす最も良い言葉は Agrarian versus Industrial という語句に含まれるという事に同意するものであった。^(註4)

こういった Ransom, Tate 等の Agrarians は Local color writers がその作品に託した南部の夢を一つの主張に仕上げた。Neo-Confederates と呼ばれる彼等は結局、ノスタルジックな空想

にみいられた逃亡者であり、現実逃避主義者であり、現代生活のリアリティとの対決を忌避せんとするロマンティストであった。^(註5)

Marcus Cunliffe が Faulkner の南部観の中に「とりつかれたような、相容れない愛憎の両面」^(註6)を見たように、現代の南部作家達の中に我々は南部的不正の否定と the South of mellow moon-shine and magnolia の伝統への執着の不思議な混淆を見出すことが出来る。

彼等が The South in Transition (移りゆく南部) をその主題として扱い乍ら、忌しい現実との対決の中に南部 Dixie への愛情をわずかにその片手に支えようと試みた時、おそらく彼等の脳裡には滅びゆく大地ははるかな昔の相貌をもって立ち現われたことであつたろう。それは Thomas Wolfe が南部への憎悪と糾弾の身構えにも拘わらず遂に捨て切れなかった大地であり、Faulkner の "The Bear" の中に美しくも呼び起された「荒野」であつた。

…… upon this land for South He has done so much with woods for game and streams for fish and deep rich soil for seed and lush springs to sprout it and long summers to mature it and serene falls to harvest it and short mild winters for men and animals and saw no hope anywhere and looked beyond it where hope should have been ……^(註7)

このように文学者達の心に郷愁として生き続けて来た母なる大地は、その中に生れ、育てられ、それと共に栄え衰へて来た南部の農民達にとっては、大地は自己存在の根底にまでつながるものであり信仰にまで高められた絶対的な意味を担うものであつた。

They had so much faith in nature, in the earth, and in the plants that grew in the earth, that they could not understand how the earth could fail them.

But it had fail them, and there they were waiting in another summer for an autumn harvest that would never come.

It all had happened once before.

Not to these same people, but to their forefathers.

Their forefathers had seen tobacco came and flourish on these same plots of earth.

But after its season it would no longer grow in the depleted soil.

The fields lay fallow for many years.

Then came cotton.

Cotton thrived in abundance for several generations, and then it, too, depleted the soil of its energy until it would no longer grow.

First, tobacco, and then cotton; they both had come and gone. But the people, and their faith, remained.^(註8)

彼等の「信ずる心」とはこうである。その昔、音を立てて崩れ落ちた王者南部が突如白い灰の中からフェニックスの如く立ち上り、南部に再び繁栄がやって来る。その日は前触れもなく、突如、啓示の如く訪れるであろう。その日こそ、彼等の呪わしき現実が一瞬の間に栄光の朝にとってかわる。母なる大地は再び美しき装いをこらし、神の恩寵は惜みなき祝福を南部に与えるであろう。彼等はその日の来るのをひたすらに信じ乍ら、今日もやはり待ち続けているのである。

我々は南北戦争の後に残されたものが、破壊したものに対する憎悪と偏見、破壊されたものに対する夢とノスタルジーである事を先に知り得た。そしてこういった夢とノスタルジーが信仰の程度にまでとりつかれたものであることは、実は彼等の Negro への憎悪と偏見を解明する一つの手がかりになる。即ち彼等がいわれなき信仰にとりつかれているという事実は彼等から富と繁栄を奪った Negro への偏見と憎しみがいわれなき程度にまで根強いという事実の裏付になる。だから彼等の途方もない夢が現実の中にともすれば崩れ去ってゆこうとする時、Negro への憎しみは炎を立

て燃え上るのである。次章に於て我々はかかる Negro への偏見と憎悪を系統的に、分析的に把握する事によって南部の性格をより具体的に理解せんと努めるであろう。

Ⅱ. 南部の黒人への憎悪と偏見

黒人への偏見を究明する場合、アメリカ人の東洋人或はインディアンへの偏見と、それとの質的差、及びアメリカ南部人と北部人との間の黒人への偏見の質的差を明らかにする事が役に立つ。

インディアンへの偏見との差

東洋人、或いはインディアンに対する偏見は明らかに皮膚の色と係りを持っている。我々は確かに彼等が日本人に対して white supremacy の意識から出発した態度を示すことを知っている。だからといって東洋人に対する彼等の偏見と黒人へのそれが全く同質のものであると即断するのは危険である。例えば在米邦人が Negro と同じ扱いをうけたという話は聞かないのである。アメリカにあっては colored people は Negro と synonym である。インディアンに対してもある程度の偏見はある。Sinclair Lewis の *Kingsblood Royal* はアメリカ人の Negro とインディアンに対する態度の差を知る上に恰好の材料を提供してくれる。主人公 Neil Kingsblood は Kingsblood という苗字から王統の血をひいているかも知れないという父親の suggestion によって、家の系図の調査にとりかかる。父方の系図からは結局何も得る事のなかった Neil は、ことのついでに母方の系図をも調べにかかる。その結果、意外にも母方の先祖 Xavier Pic は Negro であったという事実が判明するのである。調査の途中で祖母から Xavier Pic はインディアンであったという事実を聞き、更に調べを進めていったところ彼は実はインディアンではなく Negro であったという事が明らかにされるわけである。はじめ Xavier Pic がインディアンであった事実を祖母から聞いた Neil は軽いショックをうける。

Neil was in a small state of shock. In a general way, he believed that Indians were very fine people—they were good at canoeing and the tanning of deerskins. But it was a tumble from the castle of a Duc de Picardie to a bark lodge, smoke-encrusted. ^(註9) 又次のような思い出もあった。

He was recalling that, as a small boy, from some forgotten hint or other of Gramma Julie, he had for a while considered himself to have a warlike Indian streak in him. He had boasted of it to Ackley Wargate, and that pale scion had been envious. Yes, a royal heritage, Chippewa bravery; a people unafraid of rocks and nightfall and creeping enemies. ^(註10)

この様にインディアンの血をひいている事に多少の抵抗感はあるにしても、状況によっては、その事実がむしろ好ましいとさえ感じられる場合があり得るのである。同じ Neil が Xavier Pic は実はインディアンではなく、真正のニグロであった事を知った時の感じ方はこれとは全く異ったものであった。

He was in a still horror, beyond surprise now, like a man who has learned that last night, walking in his sleep, he murdered a man, that the police are looking for him. ^(註11)

殺人を犯し、警察が犯人として彼を追跡してしているという感じ方は彼の予想される断罪への恐怖の説明になる。その運命は断頭台につながるものであり、逃れる術のない絶対絶命の相貌をもっている。Negro であることの意味はすなわち、かかる戦慄すべき予告と決定とを指示しているのである。このような Neil Kingsblood のニグロとインディアンに対する反応の仕方の差は、いうまでもなくアメリカ人のニグロとインディアンへの偏見の差と相関的なものである。随ってニグロとインディアンへの偏見の間の甚しい落差はニグロにはインディアンや東洋人にはない全く別の条

件が存在しているという事実を裏付けるものである。それは皮膚の色とか文化の程度とかいった、その人種に本来的な、或は自律的に身につけた属性と係りを持つものではなく、それとは全く異質の条件が白人のかゝる偏見の形成にあずかったものとする事が出来る。随ってその条件とは一体何であるかという事が当然我々の問題になって来るであろう。

南部と北部との偏見の差

我々はこの章のはじめに於て、黒人への偏見を究明する場合、東洋人或はインディアンへの偏見との差と共に、アメリカ南部人と北部人との間の黒人への偏見の質的差を明らかにすることが役に立つと述べたが、その質的差を解明する為には先づ、一般的に「偏見とは何か」という問題から出発するのが便利である。John Harding 等によれば偏見とは反応傾向がすぐれて拒否的である場合の outgroup に対する態度をいう。^(註12) この場合、態度とは他の人又は他の集団に対していろいろ特殊な方法で反応しようとする傾向又は傾向群を指している。このような intergroup attitudes には三つの側面がある。その一は cognitive 即ち認知的な側面であり、その二は affective 即ち感情的側面、その三は conative 即ち動態的側面である。いいかえるならば intergroup attitudes は人がある ethnic group に対して抱く信条、感情及び意図的行動の諸点から記述されるということである。勿論、Harding 等のいうように個人の信条には情緒又は感情という倍音が含まれている。同様に少数者集団に対する彼の感情的な反応と、前者に対して彼が取らねばならぬと考えている諸種の行為とは非常に密接に雑り合っていることはいうまでもないが、このようなカテゴリーに分けて考えることによって intergroup attitude が一層明らかに理解されることになるわけである。

intergroup attitude を構成する認知的、cognitive な要素とは、いいかえるならば、人が各種の ethnic group に対して抱く stereotype である。この様に Harding 等は intergroup attitudes を決定する一つの要素として stereotype をあげているが、これはアメリカ南部と北部とのニグロへの偏見の質的差を考える場合の一つの手がかりになる。一般に知られている様に、アメリカに於ける黒人人口の大部分は南部に集中している。随ってアメリカの北部、中部、西部の人間の中には殆どニグロとの接触なしに生活している人が可成り多いはずである。Rosenblith は South Dakota 州に於ては、ニグロとユダヤ人が全然居ないにも拘わらず、これらの集団に対する偏見の得点は、^(註13) Harvard, Radcliffe, Dartmouth で得た得点よりも高いという報告を行っている。従ってこれらの地方でのニグロへの偏見は、ニグロとの接触によって形成されたものではないから、それはニグロへの発達した stereotype によって形成されたものであると考える事が出来る。又アメリカのある学者は、アメリカに於ける反ニグロ的偏見は一般に南部に於て最も強いと報告されているにも拘わらず、^(註14) 事実はニグロに対する態度には地域的な差が認められない、そしてその理由は明らかではないとの報告を行っている。上に述べた二つの報告から知り得ることは、恐らくニグロへの尺度化された拒否的態度の値とは、南部に於ても北部に於てもさほどの差がないということ、そして発達した stereotype があればそれは非常に浸透的なものであり、態度の形成に重大な役割を示すものであるという事である。ここで一つ注意せねばならない事は、尺度化された拒否的態度の値が等しいという事は必ずしも、偏見の内容が等しいという事にはならないという点である。尺度化された値に南北の間の差がないとしてもそれは単に偏見の一つの側面の評価でしかあり得ないし、偏見の全貌を説明する為には必要な条件であっても十分な条件とはいいい難いからである。

偏見は後天的に学び取られるものであり、遺伝乃至は生得的なものでないことは大方の学者の認めている所であるが、R. Benedict が「人は特定の慣習の中に生れ、誕生の瞬間から、その慣習によって経験と行動が形づくられる。彼が話すことが出来る頃にはもう彼は文化の少さい被造者になっている。彼が成人して文化活動に参加することが出来る頃には文化の習慣は彼の習慣であり、文化のもつ信仰は彼の信仰になっており、文化の不可能は彼の不可能である」^(註15) と語っている如く、

人はその生れ落ちた瞬間から、その文化によって規定され、その社会の共通の行動様式、思考様式、感情様式といったものを受けつぎながら次第にその社会の共通の類型人として成長してゆくのである。南部人のニグロへの拒否的態度もこの様にして伝えられて来た彼等の生活、行動様式であり、思考、感情様式の一面に他ならない。一定の社会に生活する人間にとっては、この様な様式の埒外に出るという事は、或る意味に於て、その社会を全面的に拒否することを意味している。随ってこの様な文化的適応は生物の保護色、擬態などに似た一種の保身の術であるとも考える事が出来る。普通北部から南部へ行った白人のニグロへの態度乃至行動はやがて忽ち南部的になると報告されているが、それはその北部人が南部的生活、行動様式、南部的思考、感情様式を採用する事によってのみ彼の保身が可能になるという事実を物語っている。反対に南部から北部社会に入った白人は、そのニグロへの拒否的態度を改めることなく、逆に南部的思考、行動様式を北部人に押し付けようとするといわれるのは、いいかえるならば、北部には南部人の行動なり態度なりを改めしむる契機が存在していないという事を裏付けるものといひ得よう。こういった契機が存在しないという事は裏を返せば北部には、非常に浸透的な stereotype によって形成されたニグロへの偏見が存在していることの証拠にもなるわけであるが、元来 stereotype を通して形成された偏見はそれほど根強いものではなく比較的容易に除去され得る可能性を蔵している。例えば太平洋戦争中、アメリカ人が日本人に対して抱いていた偏見は現在では相当大巾に修正されたものになっているであろう事は容易に想像出来る事である。これに反して南部のニグロへの偏見の如く、史的に社会的に形成され、一つの文化的遺産として代々亨けつがれて来たものは、殆ど不可能に等しいまでに除去する事は至難である。しからば彼等が遺産として亨けついで来た反ニグロ的生活、行動様式、思考、感情様式は如何に生れ、如何に形成されて来たのであろうか、我々の関心は当然これらの点に向けられるであろう。そしてこのことは、この章の初めに伏せておいた、ニグロに於ける東洋人、インディアン等と全く異質の条件とは一体何であるかという疑問の解明にもひいては役立つことになるであろう。

南部的偏見の形成

元来アメリカ植民地は二種類の植民地から成立していた。一は北部のクロムウェル革命の主力をなした市民農民の勤労と精力とで開かれた居住植民地 Settlement Colonies であり、二は南部の旧貴族と独占商人等の利慾と主動とで開かれた栽植々民地 Plantation Colonies ^(註16) であった。自然的条件に恵まれなかった北部に奴隸制度が発達せず、農民や中産階級の自立と勤労とを促したのに対して、広大な土地に恵まれた南部は貴族的企業家の独占企業たるプランテーション農業の発達に恰好の舞台を提供した。元来、広大な自由地の存在する地方では自由な労働力は自労農民となって独立するから、大企業としてのプランテーションの労働力を充足させるためには、莫大な数の自由ならざる労働力を必要とする。ここに南部のプランテーション農業が、不自由労働力としての黒人奴隸を要求した必然性を見る事が出来るわけである。アメリカ南部に黒人の奴隸がはじめて登場したのは、ヴァージニアに於ける煙草栽培が軌道に乗りかけて来て、そのための労働力が要求されるようになった1619年のことであった。然し乍ら17世紀を通じて、アメリカ南部に於ける黒人奴隸制度はさしたる発達を見せなかった。それは当時オランダがアフリカからの奴隸貿易を独占していたし、また年期契約農民即ち白人の Indentured Servants* が農業労働者として相当広く使用されていたからである。ところが十八世紀に入るや南北カロライナに於けるプランテーション制度の発達に伴い、黒人労働力に対する需要が激増し、他方イギリス資本が黒人奴隸貿易に進出してオランダの独占を打破することもあり、加うるに白人年期契約農民が大規模化するに伴い逃亡や暴動の危険が増大した等の諸事情から次第に Indentured servants は黒人にその位置を譲ってゆくことになるのである。

* Indentured servants は年期奴隷、半奴隷等ともいわれた如く、徒弟契約による年期々間中は奴隷的に主人に隷属するものであった。たまたま逃亡を企てるものがあれば、後に黒人奴隷がそうであったように彼等は笞打たれ、烙印を押され、時にみせしめの為に火刑や絞首刑に処されることもあった。

南部に於ける黒人奴隷制度の前提として白人奴隷制度があったという事実は、黒人奴隷制度が偶然発生したものではなく、それをよりどころにしたプランテーション農業がその発生に於て資本主義的農業企業としての搾取的体制をもつものであり、かゝるが故に強制的な監督と支配とによって維持される不自由労働力を要求するものであったことを示している。又白人年期奴隷が逃亡などの際、黒人奴隷におとらない、懲罰と迫害を受けた事実は、そういった迫害は独占的農業企業家達のあくなき利潤追求への慾望の結果として行われたものであり、皮膚の色とは大きな係りをもつていないという事実を示している。

アメリカのプランテーション制を隆盛に導き、且つは黒人奴隷制度の発達を促したものは、一つには Triangler Trade の方式であった。その三角形の第一辺は New England からギニアへの線であり、彼等の船載するラム酒は非常に有利な割合で直ちに黒人奴隷と交換された。黒人を満載した奴隷船は先ずその船首を西印度諸島に向け、そこで奴隷の一部を売却して、ラム酒の原料たる molasses (糖蜜) を購入する。それから彼等はアメリカ南部に至って、残りの奴隷を売却し、そこで恐らくタバコ、砂糖等の物資を多量に仕入れた後、再び New England の港へ向うのである。この様な三角貿易を繰り返すことによって彼等の得た利益は莫大なものであった。一艘の帆船を建造するに要する費用は当時の金額で4000ドルであったが、この三角形の三遍をひとめぐりすることによって得た彼等の利益は40,000ドルに達したといわれる。このように奴隷貿易が三角貿易の形態をとることによって独占資本に莫大な利益をもたらしたという事実は、それがプランテーション奴隷制度と結びつく事によって、その各々が相互媒介的に途方もなく大規模化していった事を意味している。

更に、黒人奴隷制の発達に決定的な impetus を与えたものは1793年の Eli Whitney による綿繰機の発明であった。それまで女奴隷によって日に2,3ポンドの綿を繰り得るに過ぎなかったものが、Whitney の機械は日に50ポンドの綿を繰ることを可能にした。時恰も産業革命によって大規模化したイギリスの紡績業界は、安価にして且つ膨大な原料を要求していたが、Whitney の綿繰機と不自由労働力たる莫大な黒人労働力はこういった要求に応ずる棉花の供給を容易に可能ならしむるものであった。この機械の発明は、煙草生産が苦境に立ちはじめていた当時のプランター達にとっては正に旱天の慈雨ともいふべきものであった。かくてアメリカ南部に於ける原棉の生産高は飛躍的に増大し、それに伴ってアメリカに於ける黒人奴隷制度もその最盛期を迎えることになるわけである。プランテーション奴隷制度の最盛期といわれる1850年に於ける棉花生産高は450万俵にのぼり、まさに Cotton is King の言葉の通り棉は十九世紀の半ばに於て南部に未曾有の繁栄をもたらしたものであった。

我々は既にプランテーション制度が極めて独占的、集中的な傾向を持ったものであること、その維持者たる貴族的プランター達がすなわち黒人奴隷制度を支持し発展せしめて来た当事者である事を知り得た。随って黒人への偏見と憎悪の形成を明らかにしようとする場合、当然これらプランター達の生活乃至は考え方に先ず焦点が向けられなければならないであろう。

1860年に於ける全南部の白人人口は凡そ810万人であったが、その中で奴隷を所有する者はその家族を含めて194万人であり全人口の24.2%に過ぎなかった。逆にいうならば南部白人人口の75.8%というものは黒人奴隷と無関係に暮っていたという事になる。然も10人以上の奴隷を所有していたものはその中の僅か4%に過ぎず、50人以上の奴隷を所有した大プランター達は僅か8000人弱に過ぎなかった。更にはこれら10人以上の奴隷を所有していた大、中のプランター達は当時395万といわれた奴隷人口の65%を所有していたといわれる。これをもってしても南部のプランテーション農業が如何に集中的、独占的に行われたかが理解出来るであろう。こういった貴族的プランター達の生活は奴隷制度の拡大化によって多くの余暇を生む結果になる。その結果は彼等の関心を文学や哲

学へと向わしめ、彼等が文学、哲学のイニシャティブをとる事によって南部独特の思想体系を形成せしめる結果になる。十八世紀に於けるプランター達のヴァージニアに於ける貴族生活を Thomas J. Wertenbaker は次の如く描写する。

The eighteenth century was the golden age of the Virginia slave holders. It was then that they built the handsome homes once so numerous in the olden countries, many of which still remain as interesting monuments of former days; it was then that they surrounded themselves with graceful furniture and costly silverware, in large part imported from Great Britain; it was then that they collected paintings and filled their libraries with the works of standard writers; it was then that they purchased coaches and berlins; ^(註17) it was then that men and women alike wore rich and expensive clothing.

かかる支配階級たる貴族的プランター達が時の思想界をもリードしていたという事実は当時の南部の思想が支配者階級の利益を代表し、利権を代弁するものになって行った自然の成りゆきを物語るものである。

John C. Calhoun が "It follows, from what has been stated, that it is a great and dangerous error to suppose that all people are equally entitled to liberty. It is a reward to be earned, not a blessing to be gratuitously lavished on all alike."

"The Greek ideal of democracy was a society in which inequality, rather than equality, was recognized as the fundamental condition of nature." と説いた時、彼は期せずして南部貴族の保身の哲学を語っているのである。これはまことに不思議な哲学である。その論理は奴隷制度を必要悪である等と卑下したりはしない、黒人奴隷制度こそ神の意志にかなった positive good であると公言して憚らないのである。そして更に大事な点は彼等がおゝまじめにその論理を信じていたということである。

前述したように南部の白人の75.8%は黒人奴隷と直接の係りを持たずに生活していたわけであるが、これら南部白人の大部分を占めるいわば白人大衆の黒人との関係は如何なるものであったであろうか、我々の次の焦点はこれら白人大衆の上にしばられてゆくことになる。これら非奴隷所有農民* の大部分を占めるものは yeoman 及び one horse farmer と呼ばれる自営農民であった。

* 75.8%を占める非奴隷所有階級の中農民の占める割合は90%以上であったから、ここでは残りの10%弱を占める農民以外の大衆には觸れない。

彼等の立場は Stowe 夫人の書いている様に「最大限ののぞみは、どんな手段によってでも nigger の一人や二人を買って他の連中の仲間入りをする金を握ること」であった。彼等にとっては「金を握って」プランターに成り上るか、独占的プランターの圧迫によって poor white trash に成り下るかの二つの道しか残されていないわけである。彼等はニグロを憎むことによって自らのほかない夢を育てることが出来る。ここに彼等が独占的プランテーション制度の下に被圧迫者的立場にあり乍ら、奴隷制擁護の積極的協力者になった彼等の心の秘密がある。

これ等 yeoman, one horse farmer の下に位するのが非奴隷所有農民の凡そ20%を占めるといわれた poor white trash である。彼等の立場を特色づけるものは、貴族的プランター階級及び、yeoman 等の階級が、規模の大小の差こそあれ、一応商品生産者の立場を堅持しているのに対して常に被雇庸者として商品生産者のグループを脱落してしまっているという事実である。それは労力の提供者として常にニグロとの競争者の立場に立っている事を意味し、ニグロに対しては被搾取者としての共感に結ばれるという方向とはらずに、ニグロへの圧迫者として常に貴族的プランター、或は yeoman 等の側に立つことを意味している。clay-eaters, red-necks, low-downers 等の賤称をもって呼ばれていたこれ等 poor whites はニグロへの憎しみの中に自らが白人であるという事

実を確認し乍ら、最後の抵抗線に於て空しい自己主張を試みることになるのである。

Myrdal 女史もこの間の事情を説いて次の様に語っている。

Their (poor whites) presence in the South does not help the Negroes, however. It is, rather, the very thing which raises the need for a sky-high color bar. This class of whites knows that upper whites are disposed to regard them as "just as bad as niggers", and they know, too, they have always been despised by the Negroes, who have called them "poor white trash", "mean whites", or "po' buckra". It is in their interest, on the one hand, to stress the fundamental equality among all white people, which was the explicit assumption of the slave doctrine, and, on the other hand, the gulf between whites and Negroes.^(註18)

かくして結果に於ては Embree が "The attitude of the aristocrat and of the poor white, starting from opposite motives, often result in the same discrimination"^(註19) と指摘している様に、動機に於ては異なる白人の upper, middle, lower の三階級が期せずしてニグロへの discrimination という一線に於て利害の一致を見る事になったわけである。

すなわち南部に於ける黒人への偏見は、このような階級的な差を含み乍らも極めて拒否的な一つの方向に形成され、伝えられて行ったのであるが、かかる南部対黒人の関係は、南北戦争という大きな転機によって当然新しい意義を賦与される事になった。以下は戦後の南部の荒廃とニグロの生息を伝える一文である。

The destitution of the South at the close of the Civil War is beyond comprehension of most Americans to-day. Millions of people in the states which had comprised the Confederacy were without the necessities of life. Returning soldiers found their homes destroyed and their lands devastated. There was no money, little credit, and a serious shortage of man power. A large percentage of white Southerners of fighting age had been killed or badly maimed, and many Negroes—free, but suddenly "displaced"—used their newly won freedom unwisely, going on prolonged vacations and sometimes stealing supplies from the meager stock of the whites.^(註20)

殊に旧土地貴族達の没落は目を掩わしむるものがあつた、彼等の多くは突如襲い來つた變動に身を処する術を知らず一気に poor whites の列に身を墮して行つた。アラバマの砂地の丘陵やジョージアの松林の中にはこういった零落貧農達が群をなして住んでいた。たまたま転落を免れたプランター達は大規模なプランテーションを經營する資力もなくその保持するプランテーションを小さな農場に分割し、それを土地を所有しない白人や新たに解放されたニグロに地代を取つて貸し付ける事によってわずかにその生活の体面を保ち得たのであつた。現金で地代を払う者もあつたが、多くは Share tenant, Share cropper と呼ばれる小作人となつて、その収獲の一部を地主に支払う事になった。ここに我々は土地とつながりを持った新しい階級制度の発生を見る事が出来る。

1865年、歴史的な奴隸解放宣言によって自由の身となつた 400 万人の黒人奴隸達は突然与えられた自由を複雑な表情で受取つていた。

聯邦政府が黒人一人一人に「40エーカーの土地と一頭の驛馬」を与えるであろうという噂があつたが事実は何一つ与らられなかつた。

政府側にも、黒人側にも何らの才覚もないまゝに黒人達は結局、社会の最下層の階級として白人に奉仕するのがせいぜいであつた。

更に悪い事は彼等が制度的には既に奴隸ではなく、poor white の領域にまで侵入して來たという事実であつた。poor whites が自らを顧る時、彼等の惨めさを救ってくれるものはただ奴隸制度

の存在だけであった。自分等よりも更に下層の階級が存在するということは彼等の慰めであった。然も、黒白の皮膚の色の差が犯すべからざる階級の差の証拠として、厳然と存在していたのではないか、奴隷解放宣言はこういった彼等の救いと慰めを一瞬の間に奪い去ってしまったのである。これは poor whites のどうにも我慢のならぬところであった。彼等が自分等の領域に侵入して来た黒人を以前にも増した憎悪の眼で眺めはじめたのも自然の成り行きという事が出来るであろう。こういった poor whites のニグロへの関係を Myrdal 女史は次の様に説いている。

Lower class whites in the South have no Negro servants in whose humble demeanors they can reflect their own superiority. Instead, they feel actual economic competition or fear of potential competition from the Negroes. They need the caste demarcations for much more substantial reasons than do the middle or upper classes. They are the people likely to stress aggressively that no Negroes can ever attain the status of even the lowest white.^(註21)

こうして南北戦争は黒人への憎悪と偏見を止揚することなく、逆に新たな意味合いを附加しながら激しく拒否的な方向へと南部白人を追いやる結果となったのである。こうした白人の感情は Ku Klux Klan の跳梁、増大するリンチ事件、黒人への disfranchisement となって具体的な形を取って行った。

Ⅲ. 真正なる地方：南部

我々はこの小論に於て、南部の土地への情熱と愛情、そしてその一致したニグロへの憎悪と偏見をたよりに、南部の生活、行動様式、思考、感情様式をあとづけて来たわけであるが、これらの認識を通して我々は南部のまぎれもなき地方性をうかがい知ることが可能である。南北戦争は当然、industrialism の大波をうけ好むと好まざるにも拘わらず、大きな変動期に直面するわけであるが、そういった激動にも拘わらず、南部の伝統は抜き難いまでに彼等の心のより所となりおこめていたのである。“The separateness of the South, despite the rapid changes of recent years, continued to be a fact”^(註22)。といわれている様に南部の分離は現在ですら尚事実として存在しているのである。

元来、奴隷制プランテーション時代の南部の経済は、北部への依存、或いは北部による収奪という宿命的な局面をもっていた。アメリカ南部が奴隷制度という前近代的な仕組の中に愉安の夢を食っていた時、アメリカ北部にあって急激に発達して来た産業資本が南部の搾取、収奪という形に於て対決をせまってきたからである。南部の資本が労働力としてのニグロを増す為に、或は貴族的プランター達の華やかな消費生活の中にうたかたの如く消え去って行った時、北部の資本は計画的な企業の発展に向けられ、健全な蓄積を続けて行っていたのである。南部で使用される品物は殆ど北部に於て製造されたものであったし、北部の船舶はヨーロッパからの商品を中間搾取的に売り込んだのである。あまつさえ棉花の輸送販売はもっぱらニューヨークその他の仲買人 factor の手によってなされた為に南部は二重に北部の搾取に甘んじなければならないという事情に置かれていた。1837年にはじまった恐慌の原因を南部に於てはかかる北部への依存の中に見出し、北部との分離を主張する secession の運動が次第に勢を得て行ったのである。かくて1860年2月4日 The Confederate States of America の誕生を見、南北の運命をかけた The War of Secession に突入するわけであるが、こういった secession の意義は精神的には agrarianism と industrialism の相剋に於て把えることが出来る。この場合南北戦争が奴隷制度擁護の為に或いは奴隷制度の廃止の為に戦われたとする見方は二義的なものに落ちてしまう。

Slavery has become in the minds of many people the fundamental cause of the Civil

War, but it should not be supposed that the Southern cause was confined to this alone. The Southern position was bound up with a political, economic, and social philosophy as well as with the specific issue of slavery. Conscious of its agrarian heritage, the South favored free trade and states' rights as opposed to the encroachments of an all-powerful federal government. Many historians now hold the opinion, expressed by Edd W. Parks in his *Segments of Southern Thought* (1938), that Southerners, forced to defend slavery, developed a theory of government upon it. But the basic principles upon which their theory was based and for which, in the final analysis, the South fought were those of agrarianism and local sovereignty.^(註23)

彼等が血の代償をもってしても守り抜こうとした agrarianism は真正なる地方南部の明らかな旗じるしであり、それを守ることによってのみ南部の local sovereignty が維持されるのであった。

Benedict の主張する様に一定の文化には個人と同様に多かれ少かれ一様のしかも固有の思考行動の型がある。南部にあっては既に触れて来たように、かかる思考の独自性を支えていたものは異常なまでの土地への執着であり愛情であった。The Confederate State of America は南北戦争によってもろくも崩壊し去ったけれども、南部の心には依然としてアメリカ南部連邦は現実のものとしては生き続けているのである。

それは Caldwell が南部の poor whites の中に見た「信ずる心」といい直してもいいであろうが、ただその心が現実の冷さと背中合わせに存在しているという事実に現在の南部のあり方の一つの局面がある様に思われる。

Ransom が Declension looks from our land, it is old.^(註24) と唄った詠嘆は現在の南部のいつわらぬ実感でもあった。我々はここで現在の南部に於ける黒人への persecution が一つの明らかな方向を持っている事に気が付くのである。それは現在の南部に於ける黒白共学問題に於てもそうである様に、南部の白人が最も憎悪し嫌うものは黒人の社会的地位が向上し、黒人が白人の領域に侵入して来るという事実である。ニグロがその分を守り、黒人並の領域に留る限りに於ては白人は彼等に寛大であり親切であるとさえいえるのである。

James Weldon Johnson はこの間の事情を次のように語っている。

I concluded that if a coloured man wanted to separate himself from his white neighbours, he had but to acquire some money, education, and culture.... the proudest and fairest lady in the South could with propriety—and it is what she would most likely do—go to the cabin of Aunt Mary, her cook, if Aunt Mary was sick, and minister to her comfort with her own hands; but if Mary's daughter, Eliza, a girl who used to run around my lady's kitchen, but who has received an education and married a prosperous young coloured man, were at death's door, my lady would no more think of crossing the threshold of Eliza's cottage than she would think of going into a bar-room for a drink".^(註25)

だから南部にあっては黒人が彼等のコミュニティに侵入するということは、現実の領域に侵入するという以上の意味をもってくるのである。人種集団は偏見を持った人間が自分自身の身につけることを拒否するような何らかの特徴なり傾向なりの象徴となっている場合、転置された敵意の攻撃目標に最もなりやすいといわれるが、^(註26) 南部が自らの declension を意識し、それを拒否せんとする desperate なあがきの中に黒人に対する転置された激しい憎悪を示すことになるのである。

問題は南部がこういった declension を止揚して新しい発展への方角を取り得ないという所に存在している。declension の認識が新しい南部への契機となることなく過去の南部の繁栄への

センチメンタルな追憶とつながっているという事実、そこに今尚、南部の分離が存在しているといわれる意味があり、黒人へのいわれなき偏見を捨て切れない理由もあるのである。随って南部がいつまでも純正な地方であり続ける限り、南部の繁栄は皮肉にも現実のものとなって彼等の手に戻って来ないという事がいい得るであろう。

- (註1) Cunliffe, Marcus : *The Literature of the United States*, p. 284.
 (註2) Beatty, Richmond Croom : *The Literature of the South*, p. 438.
 (註3) *Ibid.*, p. 3.
 (註4) Cunliffe, Marcus : *The Literature of the United States*, p. 328.
 (註5) Beatty, Richmond Croom : *The Literature of the South*, p. 615.
 (註6) Cunliffe, Marcus : *The Literature of the United States*, p. 286.
 (註7) *The Faulkner Reader*, Random House, New York, p. 318.
 (註8) Caldwell, Erskine : *Tobacco Road*, "After ten years", The Modern Library, New York.
 (註9) Lewis, Sinclair : *Kingsblood Royal*, p. 63.
 (註10) *Ibid.*, p. 64.
 (註11) *Ibid.*, p. 69.
 (註12) Harding, John : *Prejudice and Ethnic Relations*, 田村栄一郎訳：偏見と人種関係, p. 4.
 (註13) *Ibid.*, p. 50.
 (註14) *Ibid.*, p. 47.
 (註15) 千輪浩監修：社会心理学, p. 247.
 (註16) 菊地謙一：アメリカ黒人奴隷制度と南北戦争, p. 20.
 (註17) Wertebaker, Thomas J. : *The Planters of colonial Virginia*, pp. 158—159.
 (註18) Myrdal, Gunnar : *An American Dilemma*, p. 582.
 (註19) Embree, Edwin R. : *Brown America*, p. 205.
 (註20) Beatty, Richmond Croom : *The Literature of the South*, p. 437.
 (註21) Myrdal, Gunnar : *An American Dilemma*, p. 597.
 (註22) Beatty, Richmond Croom : *The Literature of the South*, "Foreword", p. XX.
 (註23) *Ibid.*, p. 104.
 (註24) Ransom, John Crowe : *Poems and Essays*, Vintage Books, New York, p. 53.

Antique Harvesters

(SCENE : Of the Mississippi the bank sinister, and
of the Ohio the bank sinister.)

Tawny are the leaves turned but they still hold,
And it is harvest; what shall this land produce?
A meager hill of kernels, a runnel of juice;
Declension looks from our land, it is old.
Therefore let us assemble, dry, grey, spare,
And mild as yellow air.

- (註25) Johnson, James Weldon : *Autobiography of an Ex-Coloured Man*, p. 79.
 (註26) Harding, John : *Prejudice and Ethnic Relations*, 田村栄一郎訳：偏見と人種関係, p. 59.